

遺跡で出土し、墨書で鎌ヶ谷市の双賀辺田No.1遺跡、佐倉市の寺崎遺跡群向原遺跡・寺崎遺跡群一本松遺跡・大崎台遺跡・臼井南遺跡渡戸A地点、成田市の外小代（LOC.40）遺跡、印旛村の油作第2遺跡、佐原市の磯花遺跡、八日市場市の平木遺跡、芝山町の庄作遺跡で出土している。刻書のものは、3つの遺跡とも坏であり、島田込ノ内遺跡の甕の底部と同じ例はないようである。

なお、墨書の表の5にあげた左右2字からなる墨書のうち右側の判読できない字は「土万」とも読めそうであるが、似た墨書が成田市大袋小谷津遺跡で出土している。

さて、6号住居跡と7号住居跡は、出土する土器から時期が近いと思われるが、出土する墨書土器・刻書土器にも共通性が見られる。墨書土器では、「蘆」の字が6号住居跡で5点、7号住居跡で10点（古墳時代6号住居跡出土のものを加えると11点になる）出土している。刻書土器では、「本」が、土師器の甕の底部にヘラ書きするもので、6号住居跡で2点、7号住居跡で1点出土している。

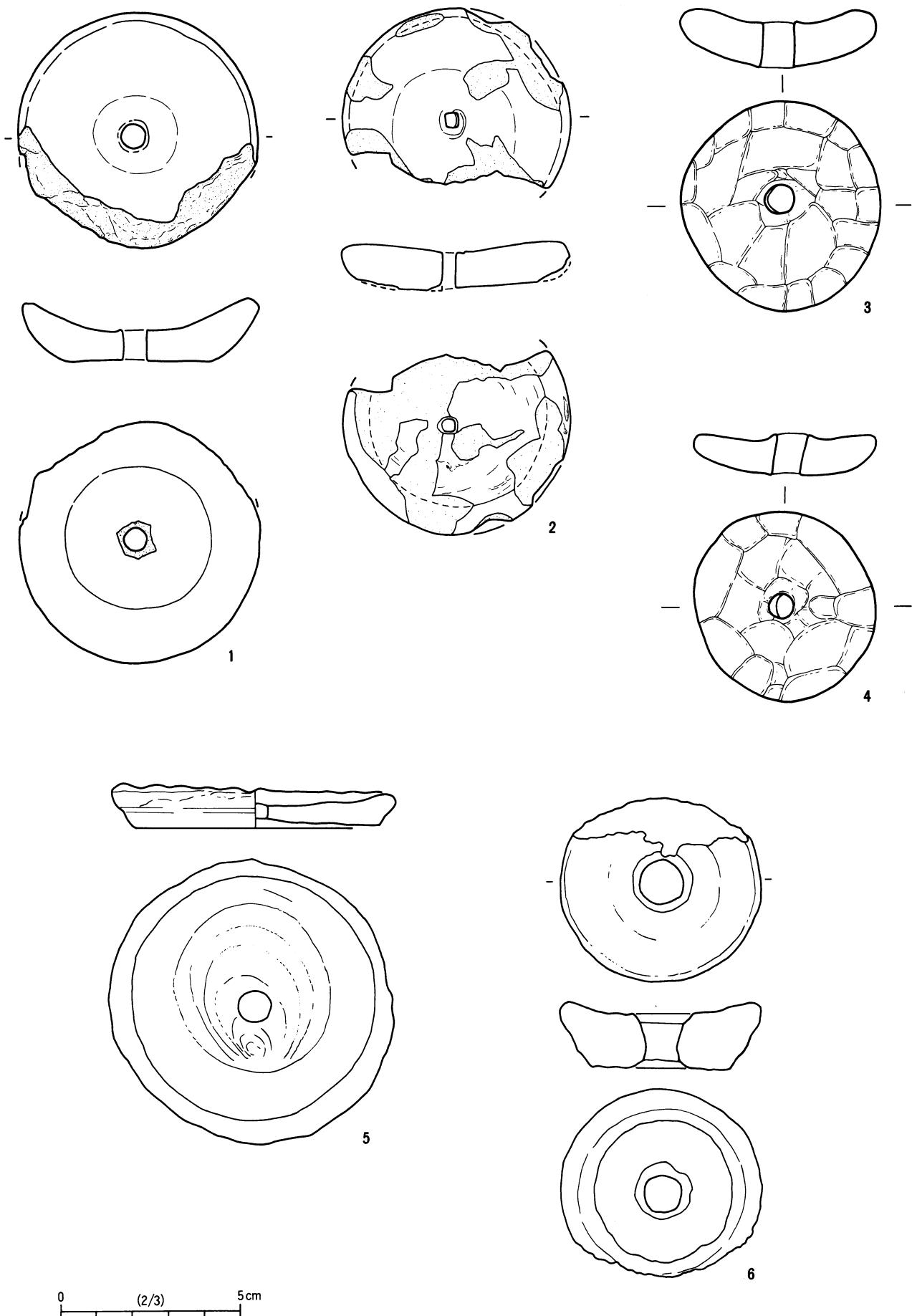
ただ、このような共通性は、2つの住居跡の住人が生活を共にしていたことまでは示さないと思われる。2つの住居跡から出土する墨書土器の多くと刻書土器の全てが、破片であることから、ほかの住居跡などで使われていたものの破片が、隣接している6号住居跡と7号住居跡の双方に棄てられたことによるものと思われる。

2 紡錘車

前述のように、島田込ノ内遺跡では、奈良・平安時代の紡錘車が、石製1点と土製1点出土した。このうち石製である歴史時代9号住居跡から出土したものは、縦断面が逆台形の類である。ところが、土製である歴史時代2号掘立柱建物跡の柱穴の1基から出土したものは、きわめて珍しい形態を持つ。全体に扁平で、縦断面が逆ハの字形に近い。まるで底に孔のあいた浅い鉢のような形態である。実測図では下側に書かれる場合が多いが、紡錘車の上面は、糸を紡ぎ出す纖維の束を受ける必要から、径に大小があるときは、径の大きい方である。したがって、ここで注目する紡錘車は、纖維のかたまりを受ける上面が凹むのである。

同形の紡錘車が、島田込ノ内遺跡の周辺で出土していないか、発掘調査報告書によって探した。調査したのは、八千代市のほか、東葛飾地区のうち流山市・柏市・我孫子市・沼南町・松戸市・鎌ヶ谷市・市川市・船橋市、印旛地区の全市町村、千葉市、市原市、東金市、大網白里町である。古代の下総国のはば西半分と上総国の北部に当たる地域である。

結果は、つぎのようである。取り上げた紡錘車とまったく同じ形をしたものは、前述の地域では出土していない。そこで、全体に扁平で、上面が凹むという点で似た形をしたものを探してみると、いくつか挙げることができた。本遺跡の紡錘車も合せて第62図に示す。なお、3～6は、報告書の挿図を改変してトレースし直したものである。1は島田込ノ内遺跡出土のものである。2は印旛郡印旛村の井戸向遺跡出土のものである。遺構からではなく、グリッド一括で時期が不明であるが、近くで瓦塔片や平安時代の土師器が出土するので、奈良・平安時代のものでよいと思われる。1にくらべると浅いが、上面が凹んでいる。かなり傷んでいるが、上面径6.4cm、下面径推定5.0cm、厚さ1.3cmである。上面は円形に側面は横方向に指でナデて、下面是回転ヘラケズリする。孔は円ではなくて方形で一辺0.4cmである。図は報告書からではなく、新たに実測したものである²⁾。3・4は、成田市の野毛平向山遺跡出土のものである。ともに002号住居址出土で、下面と側面の境がはっきりしていない。指で整形した後にヘラでナデるとのことである。3は最大径5.5cm、最大厚1.4cm、孔径0.9cm、4は最大径5.1cm、最大厚1.2cm、孔径0.8cmとのことである³⁾。



第62図 土製紡錘車集成図

さて、このような結果をもとにしたとき、島田込ノ内遺跡の紡錘車の位置をどう考えればよいのであろうか。島田込ノ内遺跡の紡錘車の上面の凹み方をどう評価するかがポイントになると思われる。紡錘車の上面が凹むことは、紡錘車にとって機能の上からは必ずしも必要ではないと思われる。凹んでいない例が、出現期に当たる弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代まで圧倒的多数を占める。では、上面が凹む例が出てきた理由は、どう考えられるであろうか。その背景となるのは、土器片を転用した紡錘車がつくられるようになったことではないかと思われる。

紡錘車の材質は、時代とともに変化している。千葉県内での細かい様子は不明であるが、およその傾向として、弥生時代は、土製がほとんどで、古墳時代は、土製と石製が多く、奈良・平安時代になると土製・石製が多いが、鉄製が増え、土器片の転用品が目立ってくると考えてよいと思われる。

土器片を転用した紡錘車について、土器のどの部位の破片を使っているかを見てみると、壺の底部の破片を利用するものがある。第62図の5にそうした例を示す。八千代市村上込の内遺跡の051遺構からの出土である⁴⁾。壺の底部破片を利用する結果、紡錘車の上面が、壺の内底であった凹んだ面になる。土器片をこのように転用した紡錘車を真似て、上面が凹んだ土製の紡錘車が作られたと思われる。真似は各地でバラバラに行われたと思われる。第62図の1と2と3・4の形がちがうのはそのためと思われる。そして、真似てはみたものの機能に大きなちがいがないので、あまり作られなかつたのであろう。出土例が少ないのでそのためと思われる。

ひとまずこのように結論づけたのであるが、上面が凹む例は、取り上げた紡錘車のようには扁平でない、土器の底部を真似たとするには分厚い類にもある。第62図の6に例を示す。東金市妙経遺跡のSK040の土坑から平安時代の土器と共に出土したものである⁵⁾。形の似たものは、確認トレンチからであるが柏市松ヶ崎泉遺跡からも出土している⁶⁾。これらについては、数がわずかなこと、扁平な類と時期が重なると思われることから、扁平な類の上面が凹んだものを真似たか、土器の底部破片を転用した紡錘車の内底の凹みを真似たと考えてよいと思われる。

ここに取り上げた紡錘車が特異で例を見ないものであるということは、土製紡錘車の製作が、奈良・平安時代には、1つの村といった単位かそれよりも小さい単位で行われたことを示唆すると思われる。

注1 財団法人千葉県史料研究財団 1996『出土文字資料集成』(「千葉県の歴史 資料編 古代」別冊)

2 財団法人千葉県文化財センター 1995『一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書』

3 財団法人印旛郡市文化財センター 1990『ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書』

4 財団法人千葉県都市公社 1974『八千代市村上遺跡群』

5 財団法人千葉県文化財センター 1994『妙経遺跡・井戸谷9号墳』

6 柏市教育委員会 1992『柏市埋蔵文化財調査報告書20』